

## フーコーをめぐるフェミニズムの布置

### Configuration of Feminists on Foucault's Work

喜 多 加実代

Kamiyo KITA

社会科教育講座

(平成12年9月11日受理)

#### 1. 序

M. フーコーの著作は、様々の分野でインパクトをもって受け止められたが、フェミニズムの領域においてもそれは同様であった。フーコーとフェミニズムとの関係についての論考も既に数多くある。そこには、フーコーの研究がフェミニズムに有効な示唆を与えるとし、フーコー主義フェミニズムの名を掲げるものから、フーコーの議論はフェミニズムを掘り崩すものだとするフーコー批判まで振幅がある。また、フェミニストがフーコーの議論のどのような部分に関心をもつのかも様々である。

しかしフーコーを肯定的に捉えるにせよ否定的に捉えるにせよ、それらフェミニズムの議論の多くは、フーコー解釈において問題があるように思われる。フェミニズム研究において重要な問題は、フェミニズムにとってのフーコーの意義であり、フーコーの解釈自体を云々する批判は生産的でないのではないかという見解もあるだろう。確かにフーコーであれ誰であれ、その著作を「使う」ことをここで否定するつもりはない。しかし、どのような「使い方」が有効なのか、フェミニズムにとってフーコーが与える新しい問いの立て方はいかなるものであるかを考える際に、フーコー解釈の問題は避けて通れないものであろう。

本稿では、このうちフーコーの「主体」概念に関するフェミニストたちの解釈を中心に論じたい。フーコーについて論じるフェミニズムにはいくつかの立場があると考えられるが、この論点に関する解釈の相違がその立場の違いを検討するための最良のメルクマールとなると考えるからであり、またどのような立場がフーコーの主張をフェミニズムによりよく生かすことになるのかについて検討する際にも、この点の解釈が重要になると思われるからである。

本稿での作業は、フーコーに対する(諸)フェミニズムの立場や解釈を整理すること、そしてフーコー解釈の妥当性という点から、それらの立場の是非を考えることを主なものとする。つまりフーコー解釈内在的な観点を取って論を進め、主体概念に関するいくつかの誤解を解消することを試みる。しかしここで検討する主体性に関する議論は、単なるフーコー解釈に留まらず、フェミニズムにおいても理論的に考察されるべき(そしてフーコーに影響を受けたJ. バトラーらによってまさに考察されている)内容と重なってくると考えている<sup>1)</sup>。したがって、間接的にはあるにせよ、この議論は、フーコーの問題提起がフェミニズムに提供する可能性を考察するものと言える。

まず次節では、フェミニストたちが、各々フーコーに対してどのような評価を与え、そ

れらがいかなる布置を形成しているか簡単に整理する。

## 2. フーコーをめぐるフェミニズムの布置

ここではいくつかの論点について、フェミニストたちがフーコーをどのように評価しているか、また、その評価の相違が、フェミニズムのいかなる立場を反映するものかを見ることにしよう。ところで、以下で取り上げる論点とは別に、多くのフェミニストが、フーコーのジェンダー・ブラインドネスを指摘している。それはフーコーに批判的な論者、基本的には賛同的な論者を問わない。とはいえ、一言でジェンダー・ブラインドネスと言っても、フーコーの著作のどこにこの盲目性を見るかは一様ではない。大別すれば、フーコーの歴史研究にはジェンダー間の差異についての記述が欠けているとする実証研究レベルの批判と、より理論的なレベルでこれを問題にする場合があるといえよう。後者についてはそれに関連する論点の箇所と触れるつもりである。

### 2. 1 アイデンティティ、セックス、身体

『監獄の誕生』(Foucault, 1975=1977), 『性の歴史 I ―知への意志―』(Foucault, 1976=1986)のなかで、フーコーは、歴史的変容の基底に不変の生物学的な身体やセックスが存在するという考えを退け、身体やセックスが歴史的に編成されるとしている。フェミニストがこうした方針に従うなら、「女性」の本質性を基礎とするフェミニズム理論にはもはや安住できないことになる。つまり、「女性」とは何か、女性の統一性とは何かが改めて問われねばならないのである。バルバスは、精神分析派の立場から、フェミニズムにとってこの女性の統一性、不変性は放棄できないものであり、それゆえフェミニズムがフーコー主義であることはできないとしている (Balbus, 1988)。

しかし逆に、「フェミニズム理論の主要な企ての一つは、女性の主体性の『脱構築』であった」(Grimshaw, 1993, p.54) とし、この点にフーコーとフェミニズムの共通性を見だし、評価する論者も多い (Sawicki, 1991) (Baily, 1993) (Bulter, 1990) (McNay, 1992)。

フーコーが系譜学について述べた、「ひとが不動だと認めていたものを危くさせ、ひとが一つのものと考えていたものを断片化する」(Foucault, 1971=1984, p.153=216) 方針を、彼女たちはフェミニズムに適したものとする。そして、むしろ女性間の多様性や差異をふまえたフェミニズムへの理論的示唆をそこに見て取り、更に、本質的なものと想定されてきた「女性」「女性性」の社会―歴史的な構築を問題にしようとするのである。「フーコーの系譜学の方法は、アイデンティティ、セックス、身体に基づく政治学についての観点を変える」(Baily, 1993, p.101) という訳である。

### 2. 2 権力と抑圧

『性の歴史 I』では、権力とセクシュアリティとの関係についても、従来の観点が批判されていた。権力がセクシュアリティを抑圧する、そうした権力概念をフーコーは転換した。この権力概念に対しても、やはり賛否の両論がよせられている。

賛成派によれば、フーコーは、セクシュアリティと権力との複雑な絡み合いを主題化したのであり、これによって、マルクス主義フェミニズムが充分捉えていなかった公的領域に解消できないミクロレベルの権力を考察することが可能になる (Bartky, 1988) (Martin, 1988) (Woodhull, 1988) (Sawicki, 1991)。しかもそれは、ラディカル・フェミニズムに

見られるような、本質的性差に基づく一枚岩的で普遍的な支配関係の想定とも異なる (Bailey, 1992) (McNay, 1992)。彼女たちは、こうして一方でマルクス主義フェミニズムを、他方でラディカル・フェミニズムを批判しつつ、フーコーに依って両者を止揚させようとする。

しかし他方で、この権力概念は、権力を非実体化し、局所的な手続きであるかのように捉えているという批判もある。権力のミクロフィジックや戦略に注目するのはよい、しかし、そのことが、権力を他の手続きと変わらないもの、どこにでもあるものとして記述することにつながり、結果的に権力を非実体化してしまったというものである (Hartsock, 1990) (Yeatman, 1990) (MacCannell & MacCannell, 1993)。「フーコーが、[権力の] 網目のイメージを喚起するとき、彼は権力を消し去る方向へもう一步踏み出すのである。…さらに、フーコーは、我々が平等であるということばかりでなく、ある意味で底辺にいる我々に、我々の状況に対する責任があると示唆しているように見える。権力は下から来る、と彼は論じているのだ。…権力はどこにでもある、したがって結局はどこにもない」 (Hartsock, 1990, pp.169)。更に、こうした権力概念では、女性が一般に男性に支配されている現実が説明できないという批判もある。権力概念にまつわるこの難点は、権力のミクロフィジックを全体的な状況に統合する理論がフーコーに欠けているためと、ジェンダー差に盲目であるために生じると説明される (Ramazanoglu & Holland, 1993)。

これとは全く対照的な批判もある。つまり、フーコーは、権力を抵抗不可能なほど徹底したものとして描いているというものである。ただしこれは、「権力の非実体化」と一見反対に見えるが、同じコインの両面のようなものであろう。つまり、ハートソックがある意味で適切に述べているように、「権力はどこでもある」が強調されるか、「どこにもない」が強調されるかの違いである<sup>2)</sup>。抵抗不可能なほど強力なものとして権力を概念化することに対する批判は、以下で述べる主体性と抵抗の問題としばしば関連して論じられている。

## 2. 3 主体性と抵抗

フェミニズム、とりわけポストモダニズムや脱構築の洗礼を受けたフェミニズムにとって「主体」や「人間」は両価的なものとなっている。それらフェミニズムは、旧来は解放の根拠とされたこの「主体」や「人間」自体が男性中心主義なものであることを告発し、その点で「反人間主義」の流れに組み入るが、その一方でそうした男性支配に対抗するために「人間主義」的な価値や「主体」概念を擁護する側面ももつ (Heckman, 1990)。

フーコーは、周知のように『言葉と物』(Foucault, 1966=1974)において「人間の消滅」を語り、『知の考古学』(Foucault, 1969=1981)でも認識主体を中心とするような思想史を批判した。また『監獄の誕生』以降は、そうした主体の成立(主体化)をむしろ権力との関係で分析しようとした。したがって、とりわけ権力に対する抵抗を考える際、主体性や主体化の問題が焦点となってくる。主体までもが権力に構成されるとフーコーが考えていたのだとすれば、抵抗を虚しいものとしてしまうのではないかという懸念や批判はしばしば見られる。「権力のあるところ抵抗はある」というフーコーの定式化だけでは満足しない論者は多く、その抵抗を保証するための積極的な主体の概念化が必要なのではないか考える者も多い。フーコーの主体をどう解釈するか、またフェミニストがいかなるスタンスをとるべきかについても議論は分かれている。本稿で検討したいのも、まさにこの点の解釈についてであるが、ここではまずフェミニズムにおけるいくつかの解釈と評価を示しておこう。

最も批判的な論者は、ここにフーコーの自己矛盾、論理的な破綻を指摘している。つまり、フーコーは主体を脱構築し、権力による効果だとしているが、抵抗が可能になるためには、フーコーが否定したはずの創発的主体が実は必要になる。その点でフーコーの議論は矛盾している、という訳である (Balbus, 1988)。

また、このような全面的な否定には至らず、フーコーの主体に関する上のような指摘の重要性を認めつつも、抵抗の主体の理論化がフーコーには不十分であるとする論者もいる (Bartky, 1993)。

第三の立場は、フーコーの議論には、抵抗の可能性が十分書き込まれており、上の批判は当たらないとするものである。更にこのなかでも立場は分かれる。一つは、抵抗の主体の概念化は、フーコーの著作に内包されているとするものである (McNay, 1992) (Heckman, 1990) (Weedon, 1988)。「フーコーのいう主体は、構成されるものであるが、主体性を決定する知／権力軸に対する一つの『苦悩』や『恒常的な怒り』でもある。近代主義的な概念では、構成される主体は単に受動的に決定されるだけだが、フーコーの概念では、構成される主体は抵抗する主体である」(Heckman, 1990, p.73)。その「主体は、言説の実践において社会的に構築されるが、彼女〔主体〕はなお思考し、感情を持つ主体として存在するのであり…彼女を構成する言説の関係やそこに生きている社会について反省できる主体であり、ありうる選択肢から選ぶことのできる主体なのである」(Weedon, 1987, p.125)とされる。もう一つの立場は、抵抗の可能性は権力概念それ自体のなかで十分指摘されているので、主体という形でそれ以上を要求する必要はないというもの (Grimshaw, 1993) である。

ところで、論点2.1, 2.2についての肯定的評価と否定的評価は、フーコーの解釈そのものの相違から来るというより、フーコーを媒介にしたフェミニズム理論間の相違を反映するものであると考えられる。フーコーという名が代表しているのは、(1)女性間の多様性や差異を考慮し、本質主義を克服しようとする立場であり、(2)従来の権力観を批判し、ミクロレベルの(あるいは個人間の)権力関係を分析しようとする立場である。これは、別の文脈で例えばポストモダン・フェミニズムと呼ばれる立場と殆ど重なっているだろう。そしてこうした論点は、旧来のフェミニズムの立場を批判し、新たな方向性を模索するフェミニストによって、すでに提起されていたものだったはずである。「フーコーにラブレターを送りたくなったフェミニスト」(Morris, 1988, p.26)がいたとすれば、それは、フーコーがこうした問題に何らかの指針を与えてくれるように見えたためであろう<sup>3)</sup>。そしてフーコーに対する批判は、その旧来の立場から (Balbus, 1988) か、新たな問題意識に同意しつつも、相対主義に陥る危険を懸念する立場からなされているといえよう。

一方、2.3の論点については、むしろフーコー解釈をめぐる対立が形成されている。たしかにフーコーの議論自体に否定的であるバルバスと、最後にあげたグリムショウには隔たりのある。しかし前三者は、少なくとも抵抗の主体の理論化が必要だと考えている点では共通しており、それがフーコーの著作の中に見いだせるかどうか争点となっている。

以上、三つの論点についてフェミニストの評価を略述した。加えて、フーコー評価の背景に、フェミニズムのどのような課題や係争点があったのかにも簡単に触れた。以下では2.3で述べた論点、すなわち果してフーコーの議論に、抵抗のあるいは反省的主体が補完されるべきなのか、またそうした主体は既にフーコーの著作の中に示されているのか、この解釈を問題にしたい。しかしながらここで検討したいのは、このような問題設定そのものがフーコーの枠組に妥当しないのではないかと、更に強く言えばフーコーが拒否した枠組

だったのではないかということである。そして、フェミニズムにこうした抵抗の主体の理論化を要請する傾向—全てがそうである訳ではないが—があるとすれば、それは前述したフーコー評価の背景にあるフェミニズムの課題と関連があるのではないかということである。ここで中心的に考察するのはフーコーの主体をめぐる解釈であるが、この解釈の如何は、また権力概念に関するフーコー読解と評価にも及んでいると思われる。

### 3. 抵抗の主体 —フーコーの<sup>ターレ</sup>転回?—

『言葉と物』以来、フーコーには、主体を否定しているという批判がしばしば向けられてきた。フーコーの議論に創発的な主体、あるいは抵抗の主体が必要であると言われる理由は、おそらく、フーコーが、主体は言説や権力によって構成されるとし、その側面だけを強調しているように見えるからであろう。ここには自らが構成される条件を反省し、抵抗を可能とする主体が補われるべきだというのが批判者の見解だといえる。

以下では、『性の歴史II —快楽の活用—』(Foucault, 1984a=1986)の解釈について論じる。それは、この著作における「自己」の主題化が、権力に抵抗する積極的主体をフーコー自身が概念化しようとしたと考える論者の一つの論拠となっているためである。この見解は更に、それ以前のフーコーの議論には抵抗の主体が補われてしかるべきだという主張とも結びつく。つまり、この晩年の著作はフーコーの一つの転機をなしており、これによって彼は以前の主張を修正し、抵抗の主体を概念化したというものである。例えばマクネイはそうように考え、これを肯定的に評価する。

逆に、それ以前の権力概念を十分なものとするグリンショウにとって、この変化は不可解なものであり、彼女はこれを理論的な後退と見ている。そこでまず両者の見解を紹介し、『性の歴史II』に二人のこのような理論的変化を認めるべきか検討することにしよう。

#### 3. 1 マクネイの解釈

マクネイは、フーコーが身体を権力との関係で捉えているとして高く評価するが、そこになお看過できない難点があるとする。それは、主体がもつばら、権力をおとなしく受け入れる「従順な身体」(Foucault, 1975=1977, pp.137=141)として把握されていることである。「フーコーが何より受動的な身体に対する権力の規律・訓練的效果という観点から権力を定義したことは、結果として、個人という存在がもつ他の側面を消し去ることになる」(McNay, 1992, p.40)。このような身体把握は、彼が他方で主張する、権力への抵抗可能性と齟齬をきたす。また、例えば『性の歴史I』で述べられている「女性身体の高ステリー化」という現象をとっても、その過程において、女性がただ受動的にその社会的な規定を受け入れたわけでないことを考慮していないというのである。

しかし以上のような困難の乗り越えが、『性の歴史II』、『性の歴史III』(Foucault, 1984b=1987)における自己の倫理学の主題化に見て取れるというのがマクネイの主張である。マクネイによれば、古代ギリシャの性倫理の考察によって、フーコーは、自己を積極的に形成する主体を概念化した。フーコーが、主体を権力との関係で形成されるものとして一端脱構築した後に、主体に回帰したことは、A. ギデンズの「構造の二重性」<sup>4)</sup>に見られるような、社会構造と個人とのダイナミックな関係を提示することを可能にするという。

とはいえ以上のような「自己の倫理学」への転換にもなお限界があるとマクネイはいう。第一に、自己形成の、どの面が肯定的で、どの面が拘束・強制(否定)的なものであるの

かという判断をフーコーが放棄していることである。さらに「自己の倫理学」に他者との関係の考察が殆どないこと、加えて、ジェンダー・ブラインドネスの問題があり、自己形成に関わる性差についてフーコーが全く考慮していないことである。

### 3. 2 グリムショウの解釈

一方、グリムショウにとって『性の歴史II』における方向転換は、全く失望的なものと映っている。2節にも見たように、フーコーに対しては、フェミニズムの脱政治化を招き、男性支配の指摘を困難にするという批判もあるが、グリムショウはこれに反論し、フーコーの脱構築的な試みこそフェミニズムと共通のものであるとする。彼女によれば、こうした批判は、フーコーの著作にある「脱構築的」側面と「再構築的」側面とを明確に区別しよう（あるいはできる）とする解釈から生じる。しかしこの両側面は明確に区別できるものではない。フーコーは、「権利」「正義」「自由」(liberty)といった言説の使用を全面的に否定しているのではなく、その潜在的な危険を指摘しているのである。そして、むしろ普遍原理に訴えるような最終的な解決の道はないとしており、諸実践の検証にとって平等性と多元性などの原理が中心的なものと認めながら、その絶え間ない解釈及び再解釈が必要だとしている。ここで脱構築と再構築は一つの実践の裏表である。それゆえ、フーコーの著作の核心には、両義性、矛盾、複雑性を承認することをめぐる政治学が、暗黙に含意されているというのである。

ところが、『性の歴史II』でのフーコーは、こうした脱構築の有効性を捨て去ってしまったとグリムショウは考える。「生存の技法」としての倫理学の提示するなかで、彼は、『監獄の誕生』で展開した主体化における自己監視という側面をもはや顧みていない。「『無害なものはない』というフーコー流の警告は、禁欲の実践と古代ギリシャの体制についての彼の考察のなかでは全く失われてしまった。フーコーは、自由であると単に想定されるにすぎない男性のエリート階級について書いている」(Grimshaw, 1993, p.67, 原文強調)。そしてマクネイと同様に一ただし層仮借のない仕方で一、この倫理学が独我論的で男性中心主義的であり<sup>5)</sup>、自己と他者との関係の考察が希薄であると指摘する。

### 3. 3 「問題化」の歴史 一解釈のオルタナティブー

『性の歴史I』とIIの間には、たしかに研究計画の変更があったばかりでなく、権力分析から倫理の記述への移行があった。ところでこの変更は、フーコーの述べるところによれば、セクシュアリティ（この概念自体が歴史的なものにすぎないことをフーコーは認めているのだが）の歴史的記述という必要から生じたものである。「…18世紀からのセクシュアリティという経験の形成と発展を分析することは、欲望ならびに欲望する主体について、歴史的かつ批判的な作業を行なうことなくしては困難だと思われた。…あらかじめ、西洋の人間が何世紀ものあいだに自分を欲望の主体として認識するにいたった、その仕方を解明するのが有益であった」(Foucault, 1984a=1986, pp.11= pp.11)。

マクネイもグリムショウも、『性の歴史II』における変更が、なによりまずはセクシュアリティの歴史を探究する上で生じた修正であることを認めてはいる。だが、両者はその背後にフーコーの理論上の、または作業仮説の変化を想定するのである。彼女たちがこのように考えるのは、ギリシャ・ローマ時代の性倫理をフーコーが次のように特徴づけるからであろう。つまりそれは、万人に課される社会的な抑圧のコードとしてではなく、自分の生を美的価値のある営みとして作り上げる「生存の技法」として問題になっていた、と。マ

クネイとグリムショウはここに、強制的なコードによってではなく、自己を積極的に形成する主体化の様式を見てとっている。

だがその結果、彼女たちはここにある困難を指摘せざるをえない。この「生存の技法」としての禁欲的倫理が、否定的な側面を特に考慮されることもなく、「自由の実践」であると述べられてしまっていることである。他者性の欠如やジェンダーブラインドネスを彼女たちが批判するのも、この古代の倫理学の記述のなかにフーコー自身の主体化の理論を想定するためであろう。彼女たちは、古代ギリシャ・ローマ自由民の禁欲の実践と、近代の（またはキリスト教的）セクシュアリテに関わる実践の内実を、能動的か受動的か、自発的か強制的か、自己監視的なものかそうでないのかに区別するよう迫られる。

しかし彼女たちが殆ど顧みていないと思われるのは、フーコーが扱っているのが「問題化」(problématisation)の歴史であるということである。彼は次のように述べている。「『狂気の歴史』以来、私が行ってきた研究全てに共通な観念は問題化…である。…今回[の問い]は、性的な活動がどのようにして問題化されるのかということだ。問題化ということは、ある前もって存在する対象を表象するという意味でも、また存在しない対象を言説によって創り出すという意味でもない。それは以下のような実践の総体、つまりあるなにものかを真偽の戯れ(jeu)のなかに導入し、かつそれを思考の対象として構成する一道德的省察という形においてであれ、科学的認識、政治的分析等々の形においてであれ—ような言説的な、あるいはまた非言説的な実践の総体なのである」(Foucault, 1984c=1984, p.257=83)。

つまり、その時代の倫理が「自由」への実践とされるのは、ギリシャの自由民男性にとって、その「自由」を確立するための能動的実践として位置づけられているからであろう。グリムショウの言い方を借りれば、それが「自由と想定される」ものであるからに他ならない<sup>6)</sup>。重要なのは、自由民男性にとってそれが強制的コードとしてより、自由の確立として問題化されていたということである。ここで、それではこの倫理と近代の性道德とは本質的にどのように違うのか、という問いを立てるべきではない。

また、マクネイたちは、この「自由の実践」としての倫理を、『性の歴史Ⅰ』までの（権力による）自己監視的な主体化や「受動的な身体」(McNay, 1992, p.40)と対立的に捉えている。Ⅱ巻ではたしかに、抑圧的で法的なものとは異なる倫理ないし「自己のテクノロジー」のありようが述べられている。だがⅠ巻で扱われたこともまたセクシュアリテの問題化という実践であり<sup>7)</sup>、これを検討するために、はじめに問い直されたのが、セクシュアリテを抑圧する社会的コードという表象であった。ここでフーコーは、権力とセクシュアリテの関係を、本質として抑圧的で法的なものとして捉えてはならないとした。逆に、セクシュアリテの問題化の仕方のなかに権力の戦略やテクニックがどのように見えるかと問うたのである。この点を考慮するなら、「生存の技法」としての倫理学は、Ⅰ巻における権力と主体の捉え方と対置されるのではなく、抑圧的—法制的な性道德観に対置されていると考えた方が妥当ではないだろうか。

以上の点からすれば、Ⅰ巻とⅡ巻の間にフーコーの転回を想定する必要はなく、したがってフーコー自身が抵抗の主体の理論化を試みていたとする見解をとる必要もないというのが、この節でのとりあえずの結論である。さて、更にここから検討したいのは、フーコーの議論には積極的主体が補われるべきとする前提そのものである。

#### 4. 考古学と言説の主体

##### 4. 1 主体をめぐるフーコー批判

前節で見たように、権力と主体の関係についてフーコーが述べたことは、しばしば、主体の権力に対する受動性や、常に既に権力に規定される状態として解釈されている。また、後述の歴史論争<sup>8)</sup>のなかでは、フーコーの歴史記述は構造優位のスタティックなものであり、歴史の変動がいかに可能かを説明しないという非難がなされた。それは換言すれば、歴史的に規定されながらも、それを乗り越える主体の創発性をフーコーは顧みていないという批判であった。この批判は、権力と抵抗の主体に関する議論と殆ど同型である。主体を規定・束縛するものとして権力や歴史を立て、その権力や歴史に規定されつつもそれを克服していくものとして主体が想定されるべきであるという批判である。

これに対し、前述のように反省的主体がフーコーには含意されているとするマクネイのような擁護もある。だがこの解釈に簡単に頷くわけにはいかないのは、前節で示した理由の他に、こうした擁護が、しばしば、主体性に関する彼の考察をあまりに容易に「克服」してしまっているように思われるためである。このことによって、彼女/彼たちは、かつてフーコーその人が「人間主義」として批判した立場に回帰してしまっているように見えるのである。『言葉と物』で消滅を予告された「人間」とは、既にデカルト主義的な主体概念ではなく、自らの状況、自身の認識の条件を自らの反省のなかで明らかにするような「経験的＝先験的二重体」であった。その次の著作『知の考古学』で「主体の総合作用」に基礎づけられた歴史観に反駁したフーコーは、構造に規定されながらも自らの受動性を乗り越えるそのような関係として構造と主体を捉えることを拒否したのであった<sup>9)</sup>。

では、フーコーが、言説や権力による主体の構成にのみ着目し、それをのりこえる主体の積極性を無視するように見えるとき、彼は何を問題にしているのか。その際の「構成」とはどのような意味であるのか<sup>10)</sup>。これはおそらく再考に値する。

##### 4. 2 言説の秩序 (ordre) と主体の構成

フーコーの批判者にとって、『言葉と物』における試みは、個人の思考や認識を規定する一時代の超越的な体系の確定や、「主体がそのなかに取り込まれ、構成される構造」(Sartre, 1966=1968, p.92=225) の記述であると受け止められたようである。そしてフーコーは、主体がこの超越的体系や構造に全的に決定されるとすることで、主体という問題を排除してしまった、とされる。フーコーはこれに反論して言う。「私が確立しようとした[言説の]実定性は、個人の思考に外部から強制されたり、その内部に住まう決定の一集合…として理解されるべきではない」(Foucault, 1969=1981, pp.271=315)。

フーコーの試みは、『知の考古学』の言うところによれば、個人の思考をそうした決定の構造に還元するものではなく、むしろ個人の思考にも決定の構造にも還元することなく、様々の言説をそれ固有の秩序(ordre)ないし水準で捉えることである。ある言説の地位は、その主体の思考との関係においてではなく、他の言説との関係で決まる。その意味で言説は歴史的な出来事であって、この出来事性や物質性を排除することはできない。言説を主体の思考を決定するなものかと思ふなら、言説のこの水準を顧みず、言説を思考と等価とする点で、主体の創発性を想定することと大差はないことになる。「重要なのは、さまざまな言説的实践をその複雑さと厚みのうちにおいて明らかにすることである。話すとは何かを一考えられたことを表現するのとは別なことを行なうものであることを…また一言



語の諸構造を働かせるのとは別なことを行なうものであることを示すことである」(Foucault, 1969=1981, p.272=315)。言説的实践に先行するとされる主体も思考も更には構造も、ここから言えば、当の言説から廻行的に構成されるものである。

したがってフーコーは次のように言うことができる。「私は主体の問題を排除したかったのではなく、言説の多様性のなかに主体が占めることのできる地位や機能を定義したかった」(Foucault, 1969=1981, p.261=301)。歴史的な出来事としての言説を、その資格において捉えるためには、主体にせよ、構造(や体系)にせよ、当の言説に対して超越的な観点を予め導入しないことが重要だったのである。そこで、むしろ言説において主体はどうあるのかということがフーコーの問いになる。問題は、主体があるかないかということでも、個人の思考がどれほど構造に規定されているかということでもない。むしろそのように想定される主体が、言説のなかにどのように現れるのかということである。言説による主体の構成ということがあるとすれば、それはこのことであるといえよう<sup>11)</sup>。

あるいは、言説において主体がどのような位置を占めるかを、「主体」は反省できると言いかもかもしれない。だが、それは、言説的实践を言説の水準で捉えるという問いとは両立しがたい反省作用としての主体を、言説の外に措定することである。そうであるとすれば、フーコーのこの問いは、批判者や良心的な解釈者がそうするように積極的な主体に回帰することで克服されるべきものではないであろう。

『知の考古学』において、この主体に関する問いは、上述のように言説に関わる理論上の問い(「主体がしめることのできる地位や機能」)という形で示されている。だがこの問いは、そのような主体が歴史的にどのように現れたかを具体的な言説的・非言説的实践から明らかにするという形で『言葉と物』でもそれ以降の著作でも問われている。単純化を恐れずに言えば、前者を「考古学」的な問い、後者を「系譜学」的な問いと考えることができる<sup>12)</sup>。先に述べた「問題化」概念との関連で両者の関係は次のように述べられている。「存在(être) [本稿との関連では、とりわけ主体の存在] が思考されうるもの、思考されるべきものとしてもたらされる問題化、またそこから問題化が形成される実践の分析…。分析の考古学的な次元は問題化の形式そのものを分析することを可能にし、系譜学的な次元は実践とその変遷からその形成を分析することを可能にする」(Foucault, 1984a=1986, pp. 17=19)。フーコーが主体について立てた問いは、女性である／になるということとはどのようなことかを考察する際の、一つの視座をフェミニズムに提供しうる。だが、それについて述べる前に権力と主体の関係について再度論及しておくことにしよう。

#### 4. 3 権力と主体

先に、主体に関する解釈の如何が権力概念の読解をも左右すると述べた。言説によって主体が構成されとすることは、言説を優越的で一方的な決定の審級とすることではなかった。フーコーは「言説的实践をその複雑さ」のうちに捉えるために、言説に外在する主体を立てることなく、言説内に占める地位や機能として主体はどうあるのかと問いを転換したのである。それは、権力分析においても同様であると思われる。フーコーは次のように述べている。「『権力』の顕現として記述されるものを分析するために、理論的置き換え(deplacement)が必要とされた。それはむしろ、権力の行使と結びつく多様な権力関係、戦略、合理的なテクニックを研究することであった」(Foucault, 1984a=1986, p.12=12)。

ここで問われていることも、権力行使を「その複雑さ」のうちに捉えることである。権力の行使を分析する際に、言説の分析と同様に、フーコーが避けようとしたのは、権力(関

係)に外在的な主体を予め立てることであつたのではないか。

フーコーのこうした方針は、一方で、権力を非実体化し、局所的な手続きに還元していると批判され、他方で、その詳細な手続きに亘るまで逃れようなく徹底した権力を描いていると批判される。しかしフーコーは、おそらく、その手続きにおいて権力はどのようなのかという問いを立てている。このことは、また、全てが権力であるとする事でもない。マクネイは、先述したように、フーコーが主体をもつば「従順な身体」として概念化したと批判する。しかし、この「従順」とは、何よりもまず18世紀当時、権力と身体との関わりにおいて多大の関心が払われた概念であることは想起されてよい (Foucault, 1975=1977, pp.142=141~)。つまり、この「従順な身体」は、主体や身体の現状についてフーコーが下した判断ではなく、身体の問題化の仕方、またその権力戦略の相關物として考えられるべきであらうということだ<sup>13)</sup>。ここにおいても重要なのは、主体がどれほど権力にからめとられているかといったことではなく、権力の戦略として読みとりうる実践のあり方にとって、身体が、または主体がどのように現れたか、どのように問題化されたかということだと思われる。

「従順な身体」を戦略の記述ではなく、実体論的な従属として把握することが、今度はそれに対する抵抗の拠点の設定を要請する。しかし権力の記述と相関的に抵抗を扱うとすれば、抵抗に関しても、その基礎づけや保証をではなく、「どのようにあるか」を問うべきものであろう。抵抗の主体の理論化を要求することは、マクネイが示すように、権力を決定の構造と主体との相互的關係として、そしてつまりは主体の受動性とそののりこえの問題として扱ってよいとすることである。だが、権力行使を探究しようとすれば、それが主体の水準や全体的構造の水準、そして両者のダイナミズムのなかにさえ位置づけることで満足できるものではないということを、フーコーの分析は示唆していると考えられる。

かつてフーコーは、自らの試みの先駆者としてマルクスとニーチェを挙げながら、彼らの著作が「人間学」の範疇で理解され、その主体の脱中心化作業がむしろ基礎づけの探究と解されてしまったことを指摘していた。そして人間学的思考の「特権を守るために、もはや彼らを当てにすべきではない」(Foucault, 1969a =1981, p.24=27)と述べた。同様に、抵抗の主体を確保するために、フーコーを「当てにすべきではない」と言えまいか。

## 5. フェミニズムとフーコーの接点

フェミニストによるフーコー解釈について、特に主体に関する議論を中心にその妥当性を検討してきたが、ここで考えたかったのは、彼の言説や権力に関する議論が(抵抗の)主体を補完すべき性質のものかどうかである。抵抗の主体が要請されるとき、それは、自らを構成するものを反省する主体という「人間学的」前提に暗に訴えてしまうように見える。フーコーの問いはこれとは異質であり、そのような主体の導入によって克服されるべきものではないであらう、というのが本稿の主張である。

まとめにかえて、ここでフーコーとフェミニズムの二つの関係を類型化することにしよう。それによって、まず、なぜフーコーがこうした「人間主義的」解釈においてフェミニズムから評価されたのかを検討し、次に、これまで見てきたフーコーの方針をフェミニズムどのように利用しうるかを簡単に示すことにする。

### 5. 1 「人間主義的」解釈の所以と妥当性

2.2で述べたように、フーコーの権力概念は、ラディカル・フェミニズムとマルクス主義フェミニズムの問題意識を止揚する形で評価されたと理解することができる。フェミニストが、旧来の権力理論の刷新としてフーコーを歓迎した背景には、「個人的な領域」が政治的であり、この政治性はその外部の階級、制度、力関係に還元しつくせないという主張と、彼の権力概念の共鳴を見たということがあろう (Martin, 1988=1992)。そして抵抗の主体をフーコーの議論の中に見いだそうとする解釈は、このような文脈と関連しているかもしれない。アダムズとミンソンが指摘するように、上記の主張は「『個人的な経験』と呼ばれる『経験』を「抑圧を知る起源として、また抑圧の変容をめざす意志の源として」(Adams & Minson, 1990=1992, p.97=53) 特権化する傾向をもつ。それゆえにまた、経験の基体としての主体を温存することになるからである。

一方フーコーは、実践において現れ、問題化されるという意味で「実在的であり、…基体 [=実体] ではない (réelle, …n'est point substance)」(Foucault, 1975=1977, p.34=33) 仕方で主体を扱っているといえよう。本稿の解釈が妥当であるとすれば、上記のような両者の共鳴ではなく、この背馳こそが問われるべきであり、またフェミニズムが基体としての主体を最終的に擁護すべきかどうかが問われるべきであろう。フェミニズムがこの点で主体を擁護しなければならないとすれば、フーコー主義フェミニズムはかなり困難な二兎を追っているように私には思われる。

### 5. 2 言説・実践に着目した分析の可能性

だがむしろもう一つの方向性として、フーコーの試みを採用し、展開するフェミニズムの可能性は存在する。彼が人間主義の批判によって示唆したのは、一つの主体や全体的構造という観点からは、言説的实践のありようを適切には把握できないということである。この立場を肯定的に受け止めるなら、フーコーが主体について立てた問いは、女性である／になるということとはどのようなことを考察する際の、一つの視座をフェミニズムに提供することがありえよう<sup>14)</sup>。そしてその方針は、「女性」や「女」<sup>15)</sup>であることをこれまで以上に、その本質や属性から限りなく遠いところで分析することを可能にするだろう。

勿論2.1で略述したように、既に何人かのフェミニストが、本質主義を回避し多様性をふまえたフェミニズムへの指針として、彼の著作を評価している。しかし重要なのは、フーコーの著作がどのような仕方で、本質主義の回避や、多様性の受容を可能にするのかという点である。言説的实践による「女性」の構成を言うことが、単に女性のあり方の文化歴史的相対性を指摘したり、文化歴史的規定を被る女性主体を記述することであるなら、それは多分フーコーなくしても可能であろう。彼の分析の眼目は、この構成を、文化の全体的構造や主体の側の内面化（あるいはこの両者の相補的關係）の問題としてではなく、言説的实践の複雑さのなかで「女性」「女」等々であることが、どのように実現されるのかと問うことを可能にした点ではないだろうか。その場合、本質主義の回避は、その実践に定位するという方針によってなされるはずのものである。

フーコーが人間主義の批判によって示唆したのは、統一的主体や全体的構造という観点からは、言説的实践のありようを適切には把握できないということであった。このフーコーの問題提起は、単に「女性性」の社会—歴史的な「構成」を指摘するのに役立つのではない。

フェミニストの何人かは、フーコーの著作が女性の多様性に目を向けることを可能にす

る点で彼を評価してきたが、しかしこの評価は、往々にしてその多様性を（例えば人種・階級などの）属性の多様性に帰着させてしまいがちであったように思われる。女性の多様性は属性間のそれに帰属させられるだけではない。「女性」は一主体がそうであるように一、その属性においてばかりでなく、その実践においても多様で分散している。フーコー主義フェミニズムにはいくつかの方向性があるが、このような形での「フーコー主義」の徹底化にこそ、その可能性が見いだせるのではないだろうか。

### 【注】

- 1) したがってフェミニズムに対するフーコーの貢献という点については、最後に若干を記したのみになっている。J. バトラーらの議論を取りあげて、フェミニズムの立場に踏み込んだ考察については稿を改めて行うつもりである。
- 2) ある意味で、と言ったのは、フーコーの議論は一見こうした主張をしているように見えるものの、それとは別のことを述べているのではないかと考えるからである。私がここで示したいのは、対照的に見える批判が、いかに同じような枠組みでフーコーを解釈しているかということである。私は後半で、別の解釈を行うつもりである。
- 3) フーコーの議論がフェミニズムの問題にどのように示唆的であると考えられたかについては、他に (NcNay, 1992) 及び (赤川, 1993) も参照。
- 4) ギデنز<sup>4)</sup>は、構造の二重性を以下のように定式化している。「構造の二重性は社会生活に基本的な再帰的性格に関係しており、構造と主体的行為 (agency) との相互依存性を示している。」 (Giddens, 1979=1989, p.69=75, 原文強調)
- 5) ここにフーコーの男性中心主義を認め、批判している論者は彼女だけではない。例えばソパーも同様の批判を行っている (Soper, 1993)。
- 6) ただし「想定される」という言い方が、多少ミスリーディングであるのは否めない。その自由は、単に想定されるだけのものではなく、性倫理を含めた実践の対象として、その意味で実在するからである。フーコーは、別のところで次のように述べている。「処罰権力のミクロフィジックの歴史は…精神にイデオロギー反応の残余をみるより、むしろ身体に対するある権力のテクノロジーの現実の相関関係を認めるだろう。精神は幻想、一つのイデオロギー効果だと言ってはならない。むしろ精神は存在する、実在を持っている、身体の周りに、表面に、中に、…絶えず生み出されている…のだ、と言わねばならない」 (Foucault, 1975=1977, p.34=33)。また、この実在に関する議論はライクマン参照 (Rajchman, 1985=1987, pp.137)。
- 7) 「人々が性 (sex) について語るために…性について言われることを聞き取り、記録し、書き写し、再配分するために、発明した仕組みの多様性、その広範囲にわたる分散」 (Foucault, 1981=1986, pp.44=47) を記述する、という言い方がⅠ巻ではなされている。
- 8) 『言葉と物』は出版当時、「歴史を謀殺する」構造主義の書と見なされ、サルトルらから批判を受けることになった。その結果、レヴィ＝ストロースとサルトルの間で始められた歴史論争は、むしろフーコー批判としての様相を呈するようになったのである。この点については、(喜多, 1992) でも若干触れた。
- 9) サルトルがフーコーを批判するなかで次のように述べていることも注目されよう。「…程度の差こそあれ、所与のものであり、それをもとにして反省が展開される中心的なカテゴリーを主体と呼ぶことにこだわるならば、その場合には、はるか以前に主体など

というものは死滅したのです。…真の問題とは…のりこえの問題なのです。それは主体あるいは主体性が、それに先行する土台のうえに、内面化と再外面化の不断の過程を通じて、いかにしてみずからを構成するかを知ることなのです。」(Sartre, 1966=1968, p.93=226~)。しかしサルトルとフーコーは、誤解しあった味方同士ではなく、この点で敵対するのである。

- 10) 「主体の構成」というのはフーコーの用語系ではない。だがここではとりあえず解釈者の言葉を用いながら、その意味をずらす方針を採ろうと思う。
- 11) 彼は、これによって主体の方を言説的实践に還元していると言えるかもしれない。それに対して、主体は言説的实践に還元できないとする批判もなされている (McNay, 1992)。また、これは構造主義と同じ問いであるという考え方もあろう。しかし、重要なのは、この「還元」が——見そう見えるのとは逆に——主体を限界づけ、切りつめる方向には必ずしも働いていないということである。ここから見れば、主体は「総合作用」を通じて収束されるものではなく、フーコーの言によれば言説において「分散される」ものである。
- 12) 系譜学について、比較的まとまった記述が見られるのは、「ニーチェ、系譜学、歴史」(Foucault, 1971=1984) および「二つの講義」(Foucault, 1977) であるが、そこでもフーコーの系譜学については「考古学」のような詳細な記述はなされていない。1971年の論文は、系譜学についての論考としてよく知られたものだが、内容的にはむしろ『知の考古学』と重なる記述も多い。また「問題化」という概念自体は、『性の歴史II』の1984年の段階で述べられたものである。だが、その他の場所でも、「考古学」が比較的に形式や言説そのものに、「系譜学」がそれに関連する実践や権力の戦略に向けられているとした規定をフーコーは行なっている。但し両者が、二つの区別可能な分析となっているかどうか私には疑わしい。両者を区別する際「次元」という言い方がされているのはそのためであるかもしれない。
- 13) マクネイとの差異を強調するために、ここでは、「問題化」や従順「概念」に重きを置く言い方をせざるをえない。しかし注11)でも述べたように、これは観念レベルの身体理解のことではなく、実践のあり方を指している。フーコーが述べているように「問題化」とは「実践の総体」なのであり、言説も(主体の)意識に帰属させられる観念ではなく、一つの実践である。その点で、これはフーコーが「身体の物質性」を扱っているという彼自身の主張と矛盾するものではないと考える。彼の以下の発言はそうのように解釈可能であろう。「私が探究したのは、権力諸関係が、主体のいさく表象にすら媒介される必要なくして、物質的に身体の厚み自体を通過できるのかを明らかにすることだった。権力が身体に達するとすれば、それは人々の意識の中に権力が内面化されるからではない。生—権力(bio-pouvoir)の、身体権力のある網目があるからであり、それは歴史文化的現象としてセクシュアリテがそれを通じて生まれたのと同じ網目である…」(Foucault, 1977→1994=1984, p.231=168)。
- 14) ここで「言説の主体」と「女性」を無媒介に言い換えることが拙速であるのは否めない。むしろこれ以降で述べる系譜学や問題化概念と関連した形で、このような問いはより適切になると考えている(これについては次の注も参照)。だが『知の考古学』とはほぼ同時期に書かれた「作者とは何か」(Foucault, 1969b)では、フーコーは作者の歴史性にも触れながら言説の主体の問題を考察している。また、考古学のこの方針をフェミニズムにおいて展開する可能性は、アダムズとミンソンも指摘しているものである(Adams

& Minson, 1990=1992)。彼らは、ドンズロの『家族に介入する国家』(Donzelot, 1977=1991)をこうした分析の例として解説している。

- 15) この観点からは、我々が「女性」と「女」をとりあえず同じものと考えていることを前提としつつ、これを対象として構成する言説的实践(ここでは当然日本語内での、この語の使用方法が含意されるが)を見る必要が出てくるだろう。おそらく両者は多くの部分で重なり合うとはいえ、同じものではないということになるかもしれない。

(引用文献中邦訳のあるものは、基本的に原文・訳書ページを併記した。但し訳文は訳書にしたがっていない場合もある。また邦文のみを参照したものは訳書ページのみ記した。)

### 【文献】

- Adams, P. & J. Minson 1990 "The 'subject' of Feminism," *m/f*, No.2, 81-101. = 1992 『フェミニズムの『主体』』『現代思想』Vol. 20-1, 40-57.
- 赤川学 1993 「セクシュアリティ・主体化・ポルノグラフィ」『ソシオロギス』No.17, 124-139.
- Bailey, M. E. 1993 "Foucauldian Feminism: Contesting Bodies, Sexuality and Identity," in C. Ramazonoglu (ed.), *Up against Foucault: Explorations of Some Tensions between Foucault and Feminism*, Routledge, 99-122. (以下 U.A.F.)
- Balbus, I. D. 1988 "Disciplining Women: Michel Foucault and Power of Feminist Discourse," in J. Arac (ed.), *After Foucault: Humanistic Knowledge, Postmodern Challenges*, Routledge.
- Bartky, S. L. 1988 "Foucault, Femininity, and the Modernization of Patriarchal Power", in Diamond, I. & L. Quinby (eds.), *Feminism & Foucault: Reflections on Resistance*, Northeastern U.P., 61-86. (以下 F.F.)
- Butler, J. 1990 *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge. = 1995 (荻野美穂訳)「ジェンダー・トラブル」第一章『思想』→1999 (竹村和子訳)『ジェンダー・トラブル』勁草書房
- Donzelot, J. 1977 *La police des familles*, Les édition de minuit. = 1991 (宇波彰訳)『家族に介入する社会』新曜社
- Foucault, M. 1966 *Les mots et les choses: Une archéologie des sciences humaines*, Gallimard. = 1974 (渡辺一民・佐々木明訳)『言葉と物—人文科学の考古学—』新潮社
- 1969a *L'Archéologie du savoir*, Gallimard. = 1981 (中村雄二郎訳)『知の考古学』河出書房新社
- 1969b "Qu'est-ce qu'un auteur?" *Bulletin de la société française de philosophie*, 63°, n°3. = 1990 (清水徹・豊崎光一訳)『作者とは何か』哲学書房
- 1971 "Nietzsche, la généalogie, l'histoire," in *Hommage a Jean Hyppolyte*, P.U. de France. = 1984 (伊藤晃訳)「ニーチェ・系譜学・歴史」『エピステーメーII』0号, 210-231.
- 1975 *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, Gallimard. = 1977 (田村俶訳)『監獄の誕生—監視と処罰—』新潮社
- 1976 *Histoire de la sexualité 1: La volonté de savoir*, Gallimard. = 1986 (渡

- 辺守章訳)『性の歴史Ⅰ—知への意志—』新潮社
- 1977 “Corso del 14 gennaio 1976,” in *Microfisica del Potere* = 1980 (Trans. by K. Soper) “Two Lectures,” in C. Gordon (ed.), *Power/Knowledge: Selected Interviews & Other Writings 1972-1977*, Pantheon Books, 78-108.
- 1984a *Histoire de la sexualité 2: L'usage des plaisirs*, Gallimard. = 1986 (田村俣訳)『性の歴史Ⅱ—快楽の活用』新潮社
- 1984b *Histoire de la sexualité 3: Le souci de soi*, Gallimard = 1987 (田村俣訳)『性の歴史Ⅲ—自己への配慮—』新潮社
- 1984c “Le souci de la vérité.” *Magazine littéraire*, n°207. = 1984 (湯浅博雄訳)「真実への気遣い」『エピステーメーⅡ』0号, 80-99.
- Giddens, A. 1979 *Central Problems in Social Theory*, University of California Press = 1989 (友枝敏雄他訳)『社会理論の最前線』ハーベスト社
- Grimshaw, J. 1993 “Practice of freedom,” in *U.A.F.*, 51-72.
- Hartsock, N. 1990 “Foucault on Power: A Theory for Women?” in L. Nicholson (ed.), *Feminism/Postmodernism*, Routledge (以下 *F/P*), 155-175.
- Heckman, S. J. 1990 *Gender and Knowledge: Elements of a Postmodern Feminism*, Poligy Press.
- 喜多加実代 1992 「歴史性と言説の水準 —フーコーの考古学と歴史の現象学—」『Sociology Today』第3号, 1-15.
- MacCannell, D. & J. F. MacCannell 1993 “Violence, Power and Pleasure: A Revisionist Reading of Foucault from the Victim Perspective,” in *U.A.F.*, 203-238.
- Martin, B. 1988 “Feminism, Criticism and Foucault,” in *F.F.*, 3-20. = 1992 (照屋由佳訳)「フェミニズム, 批評, フーコー」『現代思想』Vol.20-10, 92-107.
- McNay, L. 1992 *Foucault and Feminism: Power, Gender and the Self*, Polity Press.
- Morris, M. 1988 “The Pirate’s Fiancee: Feminist and Philosophers, or Maybe Tonight It’ll Happen,” in *F.F.*, 21-42.
- Raijchman, J. 1985 *Michel Foucault: The Freedom of Thought*, Columbia U.P. = 1987 (田村俣訳)『ミシェル・フーコー—権力と自由—』岩波書店
- Ramazonoglu, C. & J. Holland 1993 “Women’s Sexuality and Men’s Appropriation of Desire,” in *U.A.F.*, 239-264.
- Sartre, J. P. 1966 “Jean-Paul Sartre repond,” *L’arc*, n° 30, 87-96. = 1968 (平井啓之訳)「サルトルとの対話」『サルトルと構造主義』竹内書店, 49-58.
- Sawicki, J. 1991 *Disciplining Foucault: Feminism, Power, and the Body*, Routledge.
- Soper, K. 1993 “Productive Contradictions,” in *U.A.F.*, 29-50.
- Yeatman, A. 1990 “A Feminist Theory of Social Differentiation,” in *F/P*, 261-299.
- Weedon, C. 1987 *Feminist Practice and Poststructuralist Theory*, Basil Blackwell.
- Woodhull, W. 1988 “Sexuality, Power and the Question of Rape,” in *F.F.*, 167-175.